

国

語

(100分)

(注意事項)

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は一冊(1頁から19頁)、解答用紙は二枚(問題一用紙と問題二用紙)あるので注意すること。
- 3 用紙の脱落や汚れに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。
- 4 試験開始直後に、各解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入すること。
- 5 解答は、すべて解答用紙の解答欄内に記入すること。

問
題
一

(
二〇〇
点)

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

旅先で男がひとり、山寺の薄い蒲団ふとんの上に横たわっている。外は激しい雨。なかなか寝つかれずに闇の中で想念をさまよわせるうち、自分の輪郭がだんだんとぼやけてゆき、ただ茫々ぼうぼうとしたこの世界に響いてきたあらゆる声や物音が、ザアツという雨音の中に聞こえるような気がしてくる。

あれは確か、高校三年生のときに受けた模試の国語の時間だった。その文章を読みすすめるうちに、試験会場の現実感がしだいに背景に遠ざかり、男がぼつねんと寝ている部屋の暗さや湿度、降りしきる雨の音、闇の奥にうごめくものたちの気配が辺りにたちこめてくる。そのとき私は、文章を通して立ち現れてくる異質な世界の感触を全身で感じとっていた。その試験でどんな問題が出され、どんな解答を書きこんだのかはすっかり忘れてしまったが、一瞬だけ別の世界に連れ去られたかのような不思議な感覚は、今もまざまざと思いだされる。ちょうど主人公の旅人が、古い庵いおりでみた画の中の世界に一瞬、入りこんでしまったのと同じように。

そうした感覚をもたらしたのはたぶん、読み手の側の読解力の有無などとはおよそ関係のない、どこか不気味でもある物語りの力、ふだんの感覚や意識の領域を超えて、特異な世界とそこに潜在するものたちのざわめきを感じし、うつしとり、言葉によって現前させる語り手の力であっただろう。

ところで、教科としての国語と密接に関連する学問分野は文学であり、哲学であり……つまりは人文学ということになるのだろう。英語で人文学を意味する the humanities という言葉が指し示す通り、人文学は人間性を探究する学問であるとされる。とりわけ西洋社会において、古代ギリシャに遡さかのぼる学問的伝統としての人文学は、理想的な「人間」——教養ある男性市民——の特質にかかわる学問として発展した。時代を経るにつれて「人文学」とされる学問の内容は変化してきたが、人文学的研究は基本的には、そうした古典的な人間観に根をもつ「^①人間に

とつてのヒューマニティ」を前提として営まれてきたといえる。

一方で、二十世紀初頭に台頭し、主に非西洋社会を研究の対象としてきた文化人類学では、^② 独特な「人」の概念が提示されてきた。それは人間のみならず、動物や植物、山や川、精霊や神々もまた「人」であるときなすような、いわば人間ならざるもののヒューマニティを含みこんだ人間観である。ただしそれは長らく、「○○族の神話によれば……」といった注釈つきで描かれる、遠い世界に住む他者たちの思考として扱われてきた。たとえばアメリカ大陸先住民は、ジャガーやバクなどの動物は「人」であると考えている。シベリアの狩猟民は、獲物となるエルクを「人」とみなしている、等々。

人類学者は、こうした人間ならざるもののヒューマニティをめぐる人びとの思考や実践をアニミズムの一種^{注1}として理論化するとともに、そうした社会において、人間と人間ならざるものとの関係を取り結ぶシャマンの役割に注目してきた。シャマンは、動物や精霊といった人間ならざる「人」になりかわって彼らとやりとりし、その言葉を人びとに伝える。シャマンとはつまり、人間と人間ならざるものに共通するヒューマニティの領域、あるいは普遍的な魂の次元に沈潜し、それぞれの存在を結びつける力をもった者であるといえる。

人間にとつてのヒューマニティと、人間ならざるものにも共通するヒューマニティ。興味深いのは、人文学のさまざまな領域において近年、人間と人間ならざるものとの関係性をテーマとした議論が盛り上がっていることだ。あるいは人文学は、人間中心主義的な旧来のヒューマニティの枠組みを脱しつつあり、人類学者が「他者の思考」として扱ってきたような、人間ならざるもののヒューマニティをも含みこんだ新しい学問へと生まれ変わろうとしているのかもしれない。

ただし、人間ならざるものが「人」としてありうるような世界を扱ってきたのは、もちろん人類学だけではない。遠く離れた「彼ら」の世界におけるのみならず、「私たち」の中にもそうした思考や実践が脈々と息づいていること

を示してきたのは、民間伝承から近現代文学にいたるまで、さまざまなジャンルにわたる物語りの営みであるだろう。物語りは、遠い時空間に生きた人びとの喜怒哀楽とともに、「人」でもありうる動植物や自然物、精霊や魍魎ちみもに満ちた世界を現前させる。それは人間に特化したヒューマニティの次元をやすやすと超えて、世界のありようの不可思議さと、別な現実の可能性を開示する。

たとえば実学としての「国語力」なるものが、現代社会に生きる人びとにとっての最大公約数的な「現実」の前提を変えないままに、平面上の最短経路を探索するかのように正しい読解の方法をみつける能力を意味するとすれば、物語りの底力は、日常の中に異質な次元を導き入れることで、「現実」の前提そのものを揺るがすことにある。いまここに生きる「私」の存在をいつとき背景に退かせ、別な時空における人びとの生のありさまや、人間ならざるものたちの気配をうつしとり、みずからに憑依ひょういさせ、現出させることで、「この現実」を異化すること。そうした物語りの力は、いま・ここに生きる人間たちに占拠されたこの社会の閉塞を、人間ならざるものからなる世界へと開いていく。

人間の世界と人間ならざるものの世界を往き来するシャマンのように、語り手は異形のものたちの言葉を伝えることで、「この現実」^④の境界を歪ませ、その土台を揺るがせる。そうした語りを全身で受けとめるとき、読み手はいつのまにか聞き手となって別の世界に連れ去られ、その世界を満たす音にただ一心に聴き入っている。

——屋外そとは雨の音、ザアツ。

(石井美保「うつつの向こう側」による)

注1 アニミズム …… 自然界のそれぞれのものに固有の霊が宿するという信仰。

注2 シヤマン …… シャーマンともいう。

問1 傍線部①「人間にとってのヒューマニティ」とはどういうものか。説明しなさい。

問2 傍線部②「独特な「人」の概念」とはどういうものか。説明しなさい。

問3 傍線部③「物語りの営み」とはどういうものか。説明しなさい。

問4 傍線部④「この現実」の境界を歪ませ、その土台を揺るがせる」とあるが、どういうことか。説明しなさい。

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日常言語の働きの一部は論理的な思考の一部と共通している。反対にいうならば、論理性の一部を共有していないような日常言語は言語としても成立し得ない、ということである。かつてフランスの著名な社会学者であるレヴィ・ブリュール（一八五七―一九三九）は未開人の文化、習慣、言語などを研究した結果、ある種の未開人の社会では一つの言葉の意味が、同時にそれと矛盾するような意味をもったものとして使用されているという点から、このような言語でものを考えるような思考形式を前論理的な考え方 *mentale prélogique* とよんだ。しかしこのような見方はヨーロッパの言語、文化を中心として未開人を位置づける、という無意識の独善にわざわいされた非科学的な見方であるといわねばならない。

どのように単純な言語体系であっても、そのなかで「ライオンがこちらへくる」という言明と「ライオンがこちらへこない」という言明とが、まったく同じ文脈のなかで同じ意味をもっている、あるいは同じ情報をつたえているとするならば、そのような言語は実際には使用することすらできない。何故^{なぜ}ならばそれは必要な情報の伝達をおこなうことが不可能だからである。いかに原始的であろうとも、一つの言語体系が情報伝達のために使用されているところでは、情報伝達という目的のための基本的条件として、少なくとも論理の基本的な規則に従っていなければならない。「彼は社長でありながら社長ではない」などという表現は、これだけを形式的に解釈すれば、だれでも直観的に論理的矛盾を犯しているにとられるかもしれないが、しかし形式的に一見矛盾していると思われるこの文章は実は、「彼は社長という地位にありながら実際の権力からいうならば専務に頭があがらないのだ」というような^①事実をパラドキシカルに表現しているのだ、ということを多くのひとは理解している。言明の文法的形式だけからみればいかにも矛盾を犯しているようであるが、それが意味しているところの内容については論理的矛盾はない。私たちは十分に意

味のある情報をこれから受け取ることができるからである。原始社会の言語を十分に理解しないと、その特殊な文脈やパラドクシカルな表現の背後にある真の意味をつかむことはできない。断片的な、形式的な面だけみて、非論理的だとか前論理的だと速断することは、私たちが言語と論理との密接な関係を理解するならば十分に注意しなければならないことである。論理性を完全に拒否しているような言語は言語として成立することすらできないであろう。

しかし反対に「フランス語はすべての国語のうちでいちばん論理的な言語である」とか「日本語は英語よりも論理的でない」などという、往々にしてきかれる主張もまた、言語と論理との関係を十分に理解していないところから生ずる無価値な主張である。何故ならば一つの言語体系全体にかんして、それがより論理的だとか、より論理的でない、などというときの「論理的」ということの意味が確定できないからである。現在、私たちが「論理学」として具体的にさししめすことのできる論理の一部が日常言語のいろいろな働きの一部と重なりあっていることは確かであり、すでに指摘したところである。しかし日常言語の働きは、その論理との共通部分をはるかにはみでており、少なくとも現在では^②形式化できない無数の他の働きをもっている。たとえば、他人に「命令する」、「訴えかける」、自分の感情を「表わす」というような働きは論理の体系のなかへ組み入れることの不可能な言語の働きであろう。たとえば

「おれがお前の家へ行ってやる」

「僕が君の家へ行く」

「わたしがあなたの家へうかがいます」

「わたくしがあなた様のお宅へ参上いたします」

という四つの文章の内容はまったく同じものであり、話し手が相手につたえようとしている情報は同一である。しかし異なるのは、話し手と聞き手との人間関係の差異から生ずるところの話し手の「感情の表現の仕方」であり、相手と自分との身分や親密さの違いにふさわしい「訴え方の技術」である。しかもある社会形態の下では、このような

い方の区別を厳守することが人間の社会的行動を順調にする、とするならば、^③ 右のようない方の区別はきわめて大切な、場合によっては論理的な正しき以上に基礎的なものとされるであろう。わが国で、やっと基本的な単語をつぶやくことができるようになった幼児がთვისの段階にすすんで完全な文章をしゃべるようになるとき、母親が一番に気をつかい、うるさくいうのはこのようない方の問題である。

人間関係における上下、貴賤^{きせん}などのこまかい差別が社会のなかに存在するかしないか、は言語がきめるものではなくて社会構造そのものから決定される。言語にとっては存在する必要な差異をうまく表現することが、その本来の機能の一つである。このような人間関係の差異の存在が、ある社会形態のもとで望ましいか、望ましくないかは別として、もしそのような差異が存在するとすれば、その差異をうまく表現できる言語体系は、それができない言語体系より、より合理的であり、したがってまたある意味において、より論理的であるということもできる。しかし、どのような差異が重要なものとされるかは国により、また時代によって異なってくる。雪と氷の自然環境のなかに住んでいる^{注1} エスキモー人の言葉のなかには「白」をあらわすのに十数通りの異なった表現があるという。かつて魚肉を主な動物性蛋白質^{たんぱくしつ}の補給源としていた日本民族の言葉のなかには、魚の成長の時期によって異なった名前をつける、という微妙な区別をもっていた。その反面、家畜の肉についての微妙な区別はほとんど気づかれずにいたので、本来の日本語にはそれらを区別する名称はない。家畜の肉を主としていた欧米の言語ではこれと逆のことが起っている。

したがって、^④ 存在する必要な差異を表現するということは記号の論理性の一つに入れてもいいかもしれないが、それぞれの国語は自己の文化や生活様式のなかから、それぞれに必要な差異を見いだしているのだから、それらを一つの規準からみて、どれがより合理的だとか論理的だときめることはもともと不可能であろう。

さらに、日常の言語は人間同士のコミュニケーションということを最大の目的としている以上、できるだけ短い時間のなかで多くの情報を伝えるということが一つの大切な目標とされる。そこでたとえば「象は鼻がない」という

ような表現は、象が主語なのか鼻が主語なのかはつきりしないから、このままではその論理的構造が明示されていない、いわば非論理的な文章である、という人もある。しかしこの文の論理的構造をはつきりと文章にあらわして

「すべての x について、もしその x が象であるならば、 y なるものが存在し、その y は鼻であり、 x は y を所有しており、その y は長い」

といえいいかもしれない。しかし日常の言語によるコミュニケーションでは、たとえば動物園で象をはじめてみた小学生が、父親にむかってこのような文章で話しかけたとすれば、その子供は論理的であるといって感心されるまえに社会人としての常識をうたがわれるにきまっている。常識（すなわち共通にもっている情報）でわかっているものはいちいち言明のなかに入れないで、いわば暗黙のうちの了解事項として省略し、できるだけ短い記号の組み合わせで、できるだけ多くの情報をつたえることが日常言語の合理性の一つである。

要するに日常言語も一つの言語体系として通用する以上、論理を否定しては成立することすら不可能である。しかし反面において日常言語は、これを用いて他人に情報を伝達したり、それと同時に自分の内的な感情をも表わしたり、または相手の気分に変化を与え、説得したりおどしたりする、というような非常に多くの、しかも目的の異なった働きをもっている。このような異なった多くの目的をできるだけ十分に実現し、しかも全体としての調和をやぶらないようにするためには一つ一つの要求は多少の^⑤非本質的な譲歩をしなければならない。その結果として日常言語のなかに働いている論理は粉飾され、ある場合には背景におしやられることもある。しかしそれは決して否定されたのではない。

「論理学」というものはこのような粉飾や他の目的にたいする譲歩を一切きりすてて、純粹に論理的な構造とその働きだけを明示しようとする一つの学問である。その意味において日常の言語と論理学とは、重なり合う部分をもつとともにくいちがう領域をもっている。このような、日常言語と論理学との間の微妙な関係を理解することはきわめ

て重要である。

(沢田允茂^{のぶしげ}『現代論理学入門』による)

注1 エスキモ― …… イヌイットのこと。

問1 傍線部①「事実をパラドクシカルに表現している」とはどういうことか。説明しなさい。

問2 傍線部②「形式化できない無数の他の働き」とはどういうものか。説明しなさい。

問3 傍線部③「右のようない方の区別はきわめて大切な、場合によっては論理的な正しさ以上に基礎的なものとされるであろう」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問4 傍線部④「存在する必要な差異を表現するということは記号の論理性の一つに入れてもいいかもしれない」とあるが、なぜそのように言えるのか。説明しなさい。

問5 傍線部⑤「非本質的な譲歩」とはどういうことか。説明しなさい。

問
題
二

(
二〇〇
点)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

蹴鞠^{けまり}の会の際に見かけた女のこと忘れられない帝は、藏人^{くろうど}に命じて女の行方を尋ねさせていた。命を受けて女をあちこち探し歩いたが見つけることができず途方に暮れていた藏人であったが、そこへ偶然例の女が姿を現した。

この女ども、ひと車にて帰るめり。藏人、我が身はまたあやしまれじと思ひて、さかさかしき女をつけて見入れさすれば、三条白川になにがしの少将といふ人家なり。このよしを奏すれば、やがて御文あり。

「あだに見し夢かうつつかくれ竹のおきふしわぶる恋ぞ苦しき

この暮れに必ず」

とばかりあり。

藏人、御書を賜りて、かの所にもて行くに、男^アある人なれば、わづらはしうてなげくに、御使は心もなく御返しを責むれば、いかにもかくれあらじと思ひてありのままに語れば、少将、さすがにわづらはしげに思ひて、「男の身にてさうなく参らせんも、はばかりあり。あな^ウかまといさめんも、びんなかるべきことなり。人によりて異々^{ことごと}なる世なれば、ひとつは名聞^{注2 みやうもん}なり。人のそしりはさ^エもあらばあれ。とくとく参りたまへ」と勧むれば、うち泣きてかなふまじきよし、かへすがへすいたび申せば、少将申しけるは、「この三年^{みとせ}がほど、おろかならず思ひかはして過ぎぬるも、世々の契りなるべし。今また召されたまふも、浅からぬ御契りならんかし。やうやうしくて参りたまはずは、さだめて悪^あしざまなることにて、我が身も置き所なきことにもなりぬべし。よも悪^カしくははからひ申さじ。とくとく参りたまへ」とかへすがへす勧めければ、女うちなみだぐみて、御文を広げて見るに、「この暮れに必ず」とある文字の下に、「を」といふ文字を、ただひとつ墨黒に書いて、もとのやうにして御使に参らせけり。

御文、もとのやうにてたがはぬを御覽じて、むなしく歸りたるよと本意なくおぼしめすに、結び目のしどけなければ、開けて御覽ずるに、この「を」文字あり。とかく御案じあれども、御心もめぐらせたまはず。さるべき女房たちを少々召して、この文字を御尋ねありければ、承明門院に小宰相の局とて、家隆卿の娘のさぶらひけるが申しけるは、「昔大^{注6}二条殿、小式部の侍従がもとへ、『月』といふ文字を書きてつかはしたりければ、さるすきもの、和泉式部が娘なりければ、母にや申し合はせたりけん、やすく心得て『月』の下に『を』といふ文字ばかりを書きて参らせたりける、その心なるべし。『月』といふ文字は、夜^{注8}さりも待ちはべるべし、出でたまへと心得けり。また、人の召しはべる御いらへに、男は『よ』と申し、女は『を』と申すなり。されば小式部内侍も上東門院に侍りけるが、まかり出でて参りたりければ、いよいよ心まさりしてめでおぼしめしける。これも一定参りはべりなん」と申しければ、御心地よげにおぼしめして、下待たせたまひけり。

(『なよ竹物語』より)

- 注1 さかさかしき …… しつかりしている。 注2 名聞 …… 名誉。
- 注3 やうやうしくて …… もったいぶって。 注4 承明門院 …… 後鳥羽天皇の妃、源在子。
- 注5 家隆卿 …… 藤原家隆。平安時代後期〜鎌倉時代の歌人。 注6 大^{のりみち}二条殿 …… 藤原教通。
- 注7 小式部の侍従 …… 小式部内侍。平安時代の歌人。 注8 夜^{いづみ}さり …… 夜になるころ。
- 注9 上東門院 …… 一条天皇の中宮、藤原彰子。 注10 一定 …… きつと。必ず。

問1 二重傍線部「書いてつかはしたりければ」を解答欄に書き写し、例にならって品詞分解しなさい。

【例】

形容動詞・連用形	名詞	助詞	動詞・未然形	助動詞・尊敬・連用形	補助動詞・終止形	助動詞・推量・連体形 (撥音便無表記)	助動詞・伝聞・連体形	助詞
にはかに	宮	へ	渡ら	せ	たまふ	べか	なる	を

問2 傍線部ア「男ある人なれば」、エ「さもあらばあれ」、オ「おろかならず」、ク「本意なくおぼしめす」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問3 傍線部ウ「あなかまといさめんも、びんなかるべきことなり」、カ「よも悪しくははからひ申さじ」をわかりやすく現代語訳しなさい。

問4 傍線部イ「いかにもかくれあらじと思ひてありのままに語れば」とは、どういうことか。説明しなさい。

問5 傍線部ケ「いよいよ心まさりしてめでおぼしめしける」とは、誰のどのような様子か。説明しなさい。

問6 傍線部キ「『この暮れに必ず』とある文字の下に、『を』といふ文字を、ただひとつ墨黒に書いて」とあるが、どういうことか。説明しなさい。

